# 聖書日課『からし種』2023.9.24－10.1

| | |
|---|---|
| 9月24日<br>（日）<br><br>エステル<br>1章 | **「ところが、王妃ワシュティは宦官の伝えた王の命令を拒み、来ようとしなかった」（12節）。**女性は男性の「財産」と見なされ、発言権が認められない時代に、エステル記に登場する女性たちは自分の意思を明確に発したのだった。それは周囲に物議を醸すものとなったが、しかし主なる神は彼女たちをお用いになって御自身の働きを成し遂げられていった。 |
| 25日<br>（月）<br><br>エステル<br>2章 | **「エステルは、モルデカイに命じられていたので、自分が属する民族と親元を明かさなかった」（10節）。**モルデカイの深い知恵はどこから来ているのか。捕囚の民であるユダヤ人はすべてを失ったが、祖国の歴史と信仰を子どもたちに語り聞かせる教育に力を注いだ。主なる神を畏れ敬う信仰を学ぶ中で、モルデカイは主に知恵を求めることも学んだのだろう。 |
| 26日<br>（火）<br><br>エステル<br>3章 | **「ハマンは、モルデカイが自分にひざまずいて敬礼しないのを見て、腹を立てていた」（5節）。**権力を握ったハマンは、人びとが自分に敬意をあらわすのが当然と考えたようだ。愚かなことである。そして、この場面の勘違いと傲慢がやがてハマン自身を破滅に追いやる伏線となっていく。今日、主の前に謙遜な思いをいただく「わたし」であるように。 |
| 27日<br>（水）<br><br>エステル<br>4章 | **「他のユダヤ人はどうれであれ、自分は王宮にいて無事だと考えてはいけない」（13節）、「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」（14節）。**エステルが王宮に入った時、誰がこのような展開を予想できただろうか。私たちの知恵ではなく、主の深い知恵が私たちを生かす。主よ、わたしがなすべき働きを、どうか教えてください。 |

**メール配信登録メール　senfkorn.obc@gmail.com**

**メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで**

# 聖書日課『からし種』2023.9.24－10.1

| | |
|---|---|
| 28日<br>（木）<br><br>エステル<br>5章 | **「この日、ハマンはうきうきと上機嫌で引き下がった。しかし…ハマンはこれ（モルデカイが立たないのを）見て、怒りが込み上げてくるのを覚えた」（9節）。**この時点でハマンは自らの勘違いと愚かさに気づいていない。滑稽以外の何ものでもないが、この姿は神を見失った時の「私たち」の姿ではないか。主よ、わたしが勘違いしている時、どうか教えてください。 |
| 29日<br>（金）<br><br>エステル<br>6章 | **「その夜、王は眠れないので、宮廷日誌を持って来させ、読み上げさせた」（1節）。**「その夜」とは何というタイミングだろうか。そして、どうしても寝付けない王が、酒を所望することなく宮廷日誌を読みたいと考えるなど、まさに「神業」としか言いようがない。主よ、あなたの御心がなりますように。わたしの心にそれを邪魔するものがあるなら、それを取り除けてください。 |
| 30日<br>（土）<br><br>エステル<br>7章 | **「こうしてハマンは、自分がモルデカイのために立てた柱につるされ、王の怒りは治まった」（10節）。**ハマンの失脚は当然としても、かつて王自身がハマンの提案を「了」とし、「その民族（ユダヤ人）はお前が思うようにしてよい」（3：11）と語った責任がまったく自覚されていない。「神の国と神の義」の前では、この王の無責任さが正しく裁かれることを覚えたい。 |
| 10月1日<br>（日）<br><br>エステル<br>8章 | **「王の名によって書き記され、王の指輪で印を押された文書は、取り消すことができない」（8節）。**「自分の国がどれほど富み栄え、その威力がどれほど貴く輝かしいものであるか（1：4）」を誇ったクセルクセス王だが、自分が軽率に発令した法を自分で取り消す力がなかった。人である自分の限界をわきまえないわたしたちの過ちの歴史はこうして続いてきたのか。 |

大井バプテスト教会